

茅 風



— Breeze from the field of thatch-grass —

2021年2月1日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信 62号



■ 9月後半～1月の活動報告(事務局).....	1
■ 2020 定例活動③.....	2
「茅刈り-紅葉のもとで茅刈り検定も実施-」	
◆開催報告(草野 洋)	
■ 2020 定例活動④.....	4
「茅出しと山の口終い」	
◆開催報告(草野 洋)	
* 今年度の茅束生産数	
◇参加者感想(河辺 穂奈美)	
□ 茅葺き茅刈り体験研修.....	6
◇参加報告(松澤 英喜)	
□ 入会の仕事～炭焼き～.....	8
◇実施報告(藤岡 和子)	
■ 藤原だより(現地事務所報告)	
「雪に埋もれた師走の藤原」(北山 郁人).....	10
■ 野守のつぶやき(清水 英毅)	11
編集後記	(敬称略)

左・紅葉に彩られた上ノ原「ゆるぶの森」

【10月】

●3、4日 流域連携活動として、日本茅葺き文化協会主催の「茅葺き体験研修・茅葺き講座 2020」(於. 茨城県石岡市)に2名参加。

●10月31、11月1日 定例プログラム「茅刈り」実施。33名参加(会員21名、会友12名、日帰り3名)。二日目に6名が参加して5回目の茅刈検定を実施。1時間にわたり作業し17項目をチェック、全員が茅刈士補心得に認定。茅刈りの実績は二日間で85ボッチ。

【11月】

●1～3日 茅刈りイベント終了後、7名が現地に残り、古民家に合宿して茅刈り継続。

●16日 前週から炭焼き開始(従事者2名)、1回目焼き上がり。以後、雪が降るまで継続。

●21～22日 定例プログラム「茅出し・山の口終い」実施。16名参加(うち日帰り2名)。

合計 3435束(687ボッチ)※前年の3775束(755ボッチ)より340束(68ボッチ)少ない

内訳: 藤原茅刈衆 2460束(492ボッチ)

合宿 550束(110ボッチ)

イベント 425束(85ボッチ)

【12月】

●19日 流域連携活動として、日本茅葺き文化協会主催の茅刈り講座(於. 茨城県つくば市)に1名参加。

【1月】

●全国草原再生ネットワーク・ニュースレター2021年1月号に草野事務局長の「茅採取技術」の継承・担い手育成を「茅刈り検定」で」が掲載。

●1月下旬に予定されていた菅生沼の野焼きは、茨城県に緊急事態宣言が出されたことにより中止に。青水では小貝川の野焼きも含めて今年は参加を取り止め。

(以上)



秋晴れと紅葉の上ノ原

2020 定例活動③ 茅刈り 紅葉のもとで「茅刈検定」も実施 草野 洋

コロナ禍の中で青水は、緊張感を保ちながら活動を続けています。

今年度3回目となる活動は、茅場の保全活動の中で収穫の喜びが味わえる「茅刈」です。10月31日、その喜びを味わうべく33名の参加者が上ノ原に集まりました。うち初参加者が6名と森林塾青水の知名度も高くなってきたようです。

例年、まだ青いススキが多い中で刈って品質を落としていた反省から今年は1週間ほど伸ばしてみました。今年のススキの生育は夏の天候不順の影響か、穂付きが悪く、雲越萬枝師匠は「この5、6年で一番悪い」とおっしゃっていました。確かに穂が小さく、ふさふさした穂をつけたいつものススキではありません。



穂が少ないススキとカラマツ林

ススキは、花粉を風で運んで受粉させる風媒花なので受粉率は低く、その分群生して大量に花粉を生産します。イネの場合は、一か所にまとめて栽培される上に自家受粉するの

で、受粉率は90%にもなります。同じイネ科でもススキは同花受粉出来ないの、その受粉率は3割程度です。受粉時期が終わると綿毛が出来て種を遠くまで飛ばしますが、受粉出来なかった種は飛ばないので種が残りふさふさした晩秋のススキの状態になるとされています。

今年の上ノ原のススキはふさふさした尾花が少なく、穂が貧弱です。専門家でない素人の推測ですが、受粉時期の天候の影響というよりも、花の生育そのものが不良で、少ない花で一生懸命受粉したために、受粉出来なかった種が少なくなり、ふさふさの種が残っていないのではないのでしょうか。天候など気まぐれな自然環境を受け入れ、その中で精一杯子孫を残すために努力した結果だろうと考えるとなんだか愛おしくなり、いつかその時期に観察してみたいくなりました。

さて、その茅刈ですが、まずまずの天候で紅葉も見頃の中、まずは藤原茅刈衆の雲越萬枝師匠による一同を集めての茅刈講習です。

師匠の指導のポイントは、

- ①茅の穂が出ていて、群生して育ちのいいところを狙い、そこに向かって刈り進む。
- ②刈る前にオミナエシ、ハギ、ヨモギなどの雑草（ゴミ）をあらかじめ取り除いておく。
- ③刈るときは抱え刈り（稲刈りのようなつかみ刈

りでは能率は上がらない）

- ④二抱え（個人差あり）ぐらいで一束にして、ほかのやわらかそうな茅で縛る

（縛り方の説明は省略）。

- ⑤縛る場所は根から穂を除く全長の6割の高さの位置。
- ⑥1束で自立できなければ、5束でも立たない。
- ⑦5束を一ボッチにする際、丈夫そうな束を傾斜の下側に置き、傾斜の上から抱きかかえて同じ束の茅（身内）をクロスさせて前で結ぶ。
- ⑧穂のところも身内の茅で結ぶ。

- ⑨最後に各束を少し広げて安定させる。

以上ですが文章で説明するのは難しく、実際に見てやってみ

るしかありません。講習を受けた参加者はそれぞれ散らばって茅刈り。塾のスタッフが同行したり、見回ったりしてアドバイスしました。



上から、「抱え刈り」「身内の茅でクロスして縛る」「穂先も縛る。茅出しではこれを持って曳きだす」「理想的なボッチ」



ススキ草原の草紅葉とミズナラ林の紅葉

3時の休憩時には、会員の岡田さんが野点で抹茶を点て、内野さんが手作り饅頭を振舞いました。茅刈終了後には内野さんがハーモニカーを演奏し、晩



秋の草原に郷愁を誘うメロディーが流れました。

今年も刈ったボッチ数に応じて飲水思源地域通貨「ボッチ券」(左写真・日本円 200 円に相当)に還元。

その数は2日間で85枚。ボッチ券は、お米、大根、ヤーコン、手作りグッズなどの地元産物が買える仕組みで、2



日目に藤原の野菜農家が上ノ原まで移動販売に来てくれて大賑わいでした。(左写真)

今回の宿泊は go-to トラベルでホテルサンバ

ードを利用。温泉で疲れたからだを癒し、夕食の後の交流会では初参加の方の話題提供を中心に行われました。



2日目は、茅刈検定に6名が挑戦しました。茅刈検定は、2010年から始めて今年で5回目、これまで12名の茅刈士補が誕生しています。検定時間は1時間で、安全・茅刈の基礎技術、技術向上、高度技術、ボッチ数など17項目がチェックされます。今年は残念ながら茅刈士補は出ませんでした、



全員が茅刈士補心得に認定されました。

その後、茅刈を続け、昼食前の1時間ぐらいを「ゆるぶの森」の散策を行いま



- 左写真上から、
- 1 鎌研ぎからチェック
- 2 受検者と検定者と記録者
- 3 受検者は飲水思源手拭帽子を着用
- 4 検定で出来たボッチ

した。このように作業後、あるいは作業と組み合わせて森を散策するための森林アメニティー施設として遊歩道や座観場所を整備した森で、素晴らしい天然の色を見せる紅葉と、落ち葉を踏みしめる音とを楽しみました。

今年も自然の恵みをいただき、ボッチが林立する紅葉と草紅葉の上ノ原草原の風景(自然と人間の行為のマッチング)を見ることができました。



上 ゆるぶの森の座観場所で瞑想
下 黄色がまぶしいカエデ



参加者一同が上ノ原を去ったあと、8名が残留し古民家に合宿して11月3日まで茅刈を続けました。そして、その夜、上ノ原に降雪がありススキが寝てしまって茅刈がしにくくなったと萬枝師匠から報告を受けました。いよいよ冬到来です。



2020 定例活動④ 茅出し 一年の活動に感謝して「山之口終い」 草野 洋

右往左往する人間をあざ笑うかのようにコロナの勢いは収まらず、第3波が猛威を振るっています。それでも何事もなかったように、季節は巡り、初冬を迎えてしまいました。茅場の作業としては、今年度最後となる「茅出し・山之口終い」を11月21、22日に行いました。

10月末から11月中旬にかけて刈り取って寒風に晒した茅ボッチを道路端まで引き出し、トラック積みする「茅出し」そして、収穫と作業の安全に感謝

する神事をおこなう「山之口終い」。

はじまりの式の後、先日の茅刈検定で茅刈士補心得となった久保田さんと小池さんに認定書を手交して作業にかかりました。

左上・小池さんに茅刈検定認定証を授与
左・久保田さんの認定証



引き出す茅ボッチは、茅刈イベントと、その後の合宿で刈ったものの他、地元の茅刈衆が刈ったのボッチ。今年は11月3日の降雪で茅が寝てしまい、例



年より少ないようですが、それでも推定で700ボッチほど。その数を確定するのも今回の作業の目的の一つです。ボッチを見渡すと、ボランティアのボッチは倒れているものもありますが、地元茅刈衆

両肩に穂先を載せてしっかり掴み曳きだす



のものは倒れず凜として立ち、上ノ原の風景に溶け込んでいます。合宿刈のボッチも地元衆のものと遜色ないところまで上達しています。現地に着くと地元茅刈衆の刈ったボッチ数の報告があり、それによると492ボッチ(2460束)でした。

今回の参加者は18人なので一人40ボッチを曳きださなければならない。昨夜の雨でぬれて重いことも考えると、今日中に終わることは無理かと思ったが、若い人も多く、皆さんの頑張りで曳きだしは16時ごろには終了しました。町田工業のトラック2台に積み込んで約半数を送り出しました。残りは明日以降の運搬です。

作業が終わって笑顔で

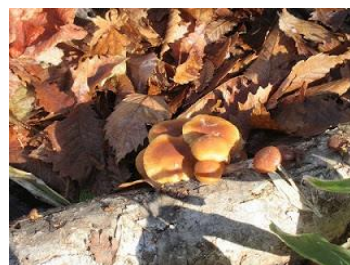
夕方になるとやはり冷え込んできました。

本日の宿は民宿「関ヶ原」。感染防止のためにいつもの交流会は中止です。

いつもより静かな夜は冷え込んで、朝、起きてみると一面に真っ白な霜が降り、霜柱も立っていました。

2日目は、十二様の前をきれいにし、しめ縄を張り、「山之口終い」の準備を済ませてから、時間をかけて「ゆるぶの森」を散策しました。まず、この

森で一番初めに若返り伐採をした「壮齢の森」で、伐採後の明るい森の状況を観察。キノコの種菌を打っておいた樺木からキノコを採取してからブナの木のある森へ。この森にはブナが多くあっても不思議ではないのに、なぜか少なく3本のみ。それでも頑張って育とうとしてるブナの稚樹の姿も見ることができます。途中、樹名板の付いた樹々で解説しま



食べ頃のナメコ

茅刈り & 茅出し感想文

「茅刈り奮闘記」

河辺 穂奈美

数年前から気まぐれに参加させていただき、青水の皆様にも少しずつ認識されるようになり嬉しく思っている河辺です。でも実は茅刈り & 茅出しは今回が2回目。3年前の記憶は曖昧で、萬枝さんのお手本を拝見しながら、かっこいい!! と初めてのようなワクワク感が高まりました。意気込んで作業開始しましたが、全然まとまらない…ワラビじゃま…こんなに難しかったっけ? と心の中で泣きながら必死に茅と格闘しました。すると遠くでピーッと笛の音。背丈より高い茅に囲まれ無心の時間はあっという間に過ぎ、2ボッチ目が完成しないうちに終わってしまったのです。自分でも驚くほどの出来なさに若干の口惜しさと申し訳なさを感じつつ、なんでしょうこの爽快感、充実感。草を刈ることがこんなに楽しいなんて。全身の毛穴から湯気が出ていたと思います。2日目には色鮮やかなゆるぶの森を散策しましたが、個性豊かな葉っぱたちはなんとも可愛く、カサカサという足音のBGMに踊り出しそうでした。そして作業後には天然なめこのお味噌汁。幸せとはこのことですね。茅出しも絶対来ようと誓い、後ろ髪を引かれながら電車に乗りました。

3週間後の上ノ原はすっかり紅葉が落ちていて、少し雪が舞う中の作業になりました。草原の中に点在するボッチの数の多さに恐れおののきましたが、パワフルな参加者の皆様のおかげで意外にもあっさり作業は終了。再びゆるぶの森を歩くことになりました。ヤッター!

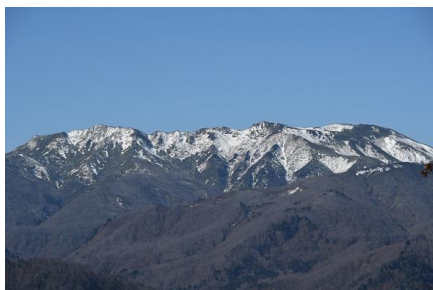
以前、麗澤中の樹木観察会で西村さんがこんなお話をされたと思います（一言一句正確には覚えておらずごめんなさい）。

「将来の夢やなりたい職業が分からなくても、好きなことや興味のあることをたくさん経験していけば、いつかそれがきっかけになって自然と見つかったりする。」

私はとっくに中学を卒業し一つの職業に就きましたが、青水の皆さんと活動していると、大人になった今でもこの言葉が自分に言われているような気がしています。

したが、動物の足跡もあって話題に事欠きません。適度な伐採もしているので林業のことも話せます。また尾根に行くほど森の様子の違いや火入れなどの人の営みが作ったクロボク土が露出しているところもあって、話は縄文時代にまで飛んでいきます。

コースを3分の1ほど進むと、茅場と集落と谷川岳、白毛門、笠ヶ岳、朝日岳の眺望がすばらしいビューポイントの峠に出るので、そこで暫し休憩。此处では今年のススキの出来具合やススキの受粉のメカニズムなどを話題にしました。峠からは茅場に向かって下り、そこから十郎太沢を通して木馬道に出ました。此处も茅場が一望できるもう一つのビューポイントです。そして北山さん、藤岡さんが炭を焼いている白炭窯に到達。精錬（ねらし）



に入った窯を見ながら炭焼きの作業工程などについて説明しました。約2時間、3.5 km ほどのコースでした。

このゆるぶの森では、3, 4 本のコースが散策でき、いずれも森のチ

カラの魅力にあふれている。散策のみでなく、今回のように茅場作業との組み合わせでココロとカラダを癒す森林浴を楽しむことが出来る。ぜひココロの病などのカウンセリングに使ってほしい。



この後、「山之口終い」神事を行い。今年の無事に終了したくさんの自然の恵みを得たことに感謝して今年度最後の茅場作業は終了した。十二様に感謝最後に今年度の茅束生産数を報告します。

イベント刈	4 2 5 束 (85 ボッチ)
合宿刈り	5 5 0 束 (110 ボッチ)
藤原茅刈衆 2,	4 6 0 束 (492 ボッチ)
合計	3, 4 3 5 束 (687 ボッチ)

今年も目標の 3000 束（古民家一棟分）を世に出すことが出来ました。



茅葺き茅刈り体験研修

日本茅葺き文化協会主催の講座に参加
松澤 英喜

日本茅葺き文化協会主催の「茅葺き茅刈り体験研修・茅葺き講座 2020」が述べ 3 日にわたり開かれ、川端、松澤の両名が参加してきました。参加者は 50 名弱、そのほとんどが、古民家のオーナー、有機農家、茅葺職人志願者など、何らかの形で茅葺きステークホルダー、しかも若手が多いのがまず驚きでした。

○前半： 10 月 3 日、4 日 常陸風土記の丘（茨城県石岡市）での茅葺き体験

石岡市は、筑波山の麓、自然環境に恵まれ、また



昔から旗本領で豊かなため、立派な民家が多い。今でも、旧八郷町を中心に茅葺民家が 100 棟も残っています。

・当日のワークショップでは、茅ごしらえ、イボ結び（荒縄で土台に垂木を固定する）、カベ結び（桟や押さえを固定）、そして茅葺きの実務をさせていただきました。



茅ごしらえは、長さ 2 メートル以上もある茅束を、ずらしたり、上下逆にしたり、切ったりして長さを整えること。屋根の上での作業効率のためで、この地方の特色とのことです。メインイベントの茅葺きの実習の現場は各時代の建物が展示されているところで、縄文時代の堅穴住居の補

修作業の一部をやらせていただきました。

1 軒の家を葺くのに、最低 1 町歩（10000 m²=1 ヘクタール）の茅場が必要、30 年もてば 30 軒分という計算で、共同の結（ゆい）で維持管理にあたっていたそうです。こうした茅場はなくなり、一方、霞

ヶ浦のヨシ原は、良質の茅場（シマガヤ=中空で小型）でしたが、飲料、工業用の水を得る目的で淡水化され、また護岸の埋め立てもあって、汚染も進み、衰退。また、昔から火入れにより炭素を固定、黒ぼく土を育ててきたが近隣の反対もあり野焼きが困難になっており、収量が半減したとのことです。

そういう経緯もあり、現在、近隣で一番の茅場は、つくば市内という、意外なところにあります。ということで、12 月 19 日、ここでの茅刈りをして参りました。

○後半： 12 月 19 日 高エネルギー加速器研究機構（茨城県つくば市）での茅刈り体験

文化庁ふるさと文化財の森に指定されている茅場は関東地方に 2 つしかありません。そのひとつは我々がみなかみ町藤原上ノ原ですが、もうひとつの茅場はこの里山にあるかと言うと、なんとつくばの「高エネルギー加速器研究機構」という科学の最先端施設の中にあります。研究所を造成したあとの荒れ地 10 ヘクタールの一部に茅が繁茂したのが発端で、毎年 12 月に刈り取りをしています。（茅刈りは、枯れてからやるのが鉄則で、そうすると炭素が根に固定され、栄養分の収奪がおこらない。冬の来るのが早い我々上ノ原と異なるところ。）



研究機構の茅場 後ろに見えるのは霊峰・筑波山

入り口のゲートでチェックを受けて入っていくと、（広大だから車で！）、まるでどこかの化学工場に入り込んだかのような。まわりには、周長 3km の衝突型円形加速器が設置されており、80 億電子ボルトの電子と 35 億電子ボルトの陽電子が走りまわっており、その内側の面積が約 150 ヘクタール、東京ドーム 33 個分だとのこと。

このうち茅の優占する場所は 2 ヘクタールほどで、地元茅葺オーナーたちは機械刈り、我々一般ワークショップ組は手刈りと 2 か所に分かれて行いました。

機械刈（写真右）は、どうやったら同じ方向にそろえるだろうかと思って観察しましたが、（たまたま見た例では）刈払い機を操作する人の横に、長い棒を持った人が



付き添い、ちょうど床屋さんがくしで揃えながら切るようなやり方。ほかに伐った茅を拾って束ねる人、これを運ぶ人と、3-4人一組で作業していました。



斜面では、床屋さん式もむずかしいでしょうし、上ノ原ではやはり手刈りのほうが安全で効率的かな、というのが感想です。

あと面白かったのは、バインダー（コンバインの小さいやつ）での刈り取り。稲敷市霞ヶ浦湖畔には背の低いシマガヤの茅場がありここでは、以前から稲刈用のバインダーを使っているそうですが、ここでもできないかと試行したとのこと。途中つる草などがあると止まってしまいましたが、おおむねうまく刈れていました。数センチくらいのお小さな束を自動的に吐き出すところが面白い。平地の強みです。



上・バインダーでの刈り取り
下・バインダーで刈った茅束

手刈りは、初心者対象のせいもあり、鎌で刈る人、縄で束ねる人の2人一組でおこなわれました。茅は完全に枯れて硬くなっており、茅で縛るわけにはいきません。縄で縛るので、一束は上ノ原のより1.5~2倍くらいの大束、すでに十分乾燥しているのでボッチ立てはせず、そのままトラックに積み込まれました。（一般に茅の値段は、周囲2尺(60cm)の縄で束ねた、直径20センチくらいの束で、生産者価格600円、末端価格1000円~3000円。これに対して、ここ、高エネルギー加速器研究機構で得られた茅は、地元茅葺き民家オーナーなどボランティアや、いわば結のメンバーによるものなので、安価に入手できているそうです。）

平地なので姿勢は楽だし茅は湿っていないので軽くて扱いやすいのですが、1本1本が太く硬く、刈り取り作業は結構大変でした。

ここでの悩みは、場所柄火入れができないこと、それと、セイタカアワダチソウや、イネ科のなかでもトダシバやメリケンカルカヤといった外来種が勢いを増し、年々劣化しているとのこと。考えられる主な原因は富栄養価、土壌の劣化ではとされています。土壌も上ノ原のようなクロボク土になっ

ていません。）

夕方、筑波大学の廣田先生によるレクチャーがありました。茅草原の価値についての話は以前からも随所で教わってきましたが、炭素循環の観点から詳しい、納得感のある説明があり、非常に有益でした。

ちょうど茅刈り前々日の12月17日、ユネスコの無形文化遺産として「伝統建築工匠の技 木造建造物を受け継ぐための伝統技術」が登録されることになったとのニュースがはいりました。対象は「かやぶき、古式の木工技術など木造建築に関わる17件(14団体)」で、対象になった日本茅葺き文化協会は意気軒高でした。

ちなみに、茅葺きに携わる人(ここでは茅手と言います)は、茅付記職人連合加盟者100名、ほか100名、合計200名くらい。昔から専業は無理で、副業としてやられてきたそうです。これからは、例えばIT従事者が副業で茅手になって形も面白いのではとは、安藤邦廣筑波大名誉教授のお言葉でした。最初に申したように、若い積極的な人が多く、新しい試みもされているようです。指導員の一人の女性は、茨城県稲敷で、茅の育成をしているという。茅場のものを株分けし、休耕田に植え付ける方法で肥料はやらない、種からの育成も試行中。石岡市も職員を茅手として育成しているとか。働き方改革で、こういう「物好き(失礼)」が増えてくると、将来は案外明るいかもしれません。

今後も、連携、協力しながら、貴重な自然資源、文化遺産を次の世代につなげていけたらいいなと思った次第です。

■入会の仕事~炭焼き~

2020 上ノ原・炭焼き作業の記録

藤岡 和子

2014年、藤原の生き字引きでした故阿部 惣一郎さん監修の元で復元した上ノ原の炭窯。2015年の初の火入れから今年で6年になりました。

炭焼きは、一年の終わりに行う入会山の冬の仕事です。一度窯に火を入れると、雪が積もり続けるまで絶やさず焼き続ける忍耐のいる仕事です。燃料エネルギーとして薪や炭を使わない生活へと移行した昨今、炭焼きをする人もほとんどいなくなり、人が入らなくなった薪炭林は荒れていきました。定期的



に間伐していたミズナラは、株立ちのまま大木となって地面に大きな影を落とします。すると、中木や低木の樹種に変化が現れます。成長の速いウツギやモミジが勢力を増し、森の単一化が起きました。その影響は、茅場にまで染み渡り、草原に侵入木が蔓延り、草の種類も限られたものとなりました。

『入会山を守る

～生物多様な薪炭林を取り戻そう～

その思いから、朝日岳と谷川岳が望める場所に炭窯を復元したのです。

私が青水の活動に加わり、炭焼き仕事を手伝うようになって6回目になりますが、今年（2020年）、始めて10日間もの長期間藤原に滞在し、繰り返される炭焼き作業に携わることが出来ました。

炭焼きの専用道具は、高熱から身を守るため柄が長く作られており重量があります。テコの原理を利用して作業するのですが、腕がプルプルして思うように道具が働いてくれません。山仕事に慣れていない人間には堪えます。普段使っていない体中の筋肉を使っているのでしょう、節々がギシギシと悲鳴を上げています。窯の中は、約1000度。暑いからといって皮膚を出そうものなら、出した部分が一瞬で真っ赤になりヒリヒリします。毎日顔は煤で汚れて真っ黒け。それでもからだも心も清らかで、キーンと冷えた冬の外気は清しく、上ノ原の自然と一体になったような幸福感に包まれていました。

2017年夏、阿部 惣一郎さんが他界され、それからは惣一郎さんの半分世代が中心となって受け継いでいます。入れては出し、入れては出し。同じ工程を繰り返しているようで、同じことなんて起こりません。壁にぶち当たるたび、生前惣一郎さんがおっしゃっていた言葉を思い出しながら作業しています。

「窯開けはゆっくり。丸太を外して一息。土をおろして一息。」

口が完全に開いても直ぐには炭を出さず、精錬させるためにまた一呼吸置きます。

「炭は繊細崩れやすい。やさしくやさしく触れなさい。」



惣一郎さんの指導を受けていた頃

一列づつ専用器具で引っかいて入り口まで出します。また一呼吸置き、鋤簾やレイキで冷まし場まで引っぱります。

「やさしくやさしく。素早く。土はかさげて。」

かさげる＝窯から出した白炭の燃焼を止めるため土

灰をふんわりと下から被せていく仕草

土灰から炭が顔を出していると、そこから燃えてしまい炭にならず燃え尽きてしまいます。

かさげて、、かさげて、、、。口ずさみながら作業すると、自然と力は優しく、からだは素早く動くのです。仕草を表す言葉『かさげる』が、作業としてからだに作用していく、伝承の力に直接触れたように思いたく感動しました。

伝承 承り伝えていく

ひとりひとり 先人から未来へ繋ぐ

架け橋の一部分であろう

森々と身に沁みる冷氣の中、炭を作ることに全身全霊を向けていると五感が研ぎ澄まされていくのがわかります。

＜視覚＞

時間を測る。黄色から白、青、透明へと変化する煙の色に意識を向ける

＜臭覚＞

焼け具合を見る。薫香、酸味の利いた香り。煙の匂いに意識を向ける

＜聴覚＞

質を見極める。ザクザク、チンチン、カラカラ、キーン。炭と炭がぶつかる音に意識を向ける

＜触覚＞

自分の存在を知る。チリチリ、ピリピリ。熱風から自分を守る体勢に意識を向ける

＜味覚＞

出来栄えを確かめる。白炭で料理して食す時。

ホームセンターで手に入る輸入された炭は、大量生産のため一気に燃やし水をかけて鎮火させて作ります。完全に炭化しないまま出荷するため使用の際煙が出て雑香が付きます。だから、精錬させてじっくりと炭化させる白炭は、比べ物にならないほど食事を美味しくするのです。

五感とは人の真髄です。炭焼き仕事をしていると、からだの芯、思考の芯、感情の芯にドスンと落ちてジワっと広がっていく感覚になります。目が冴え、頭が冴え、からだも冴えていく、人間であることの本質を教えてください。昔の人は、自分と向き合う術を知っていました。それが炭焼き仕事なのではないでしょうか。炭焼きは、現代人から失われた人生の作業のように思うのです。



＝炭焼きの工程＝

<火入れ>

朽ちた材、昨年間伐材、端材、ミズナラ以外の樹種を燃やし窯を温める

<窯閉じ>

- ① 炭材のミズナラを窯に入れる
中は高熱なので投げ入れ専用道具で立てる
中央から左右に隙間無く詰めてゆく
- ② 一杯になったら雑木を入れその間に樹皮や木っ端を挟む
空気口のパイプを固定する
- ③ 着火
- ④ 熱に強い土質の石で隙間無く入り口を塞ぐ
(今年より耐火レンガを使用)
- ⑤ 丸太と土で密閉する

<炭化中>2

- ① 陽がある内は炭材を調達する
- ② 煙の温度を確認する



8. 排気口



9. 夜の煙



11. 焼いている間に、炭材の大きさを窯のサイズに揃える作業



10. 朝の煙り

<窯開け>

- ① 土壁を崩す。一呼吸
- ② 上部を開ける。一呼吸
- ③ 口を全て開け、精錬
- ④ 一列づつ木の上部を専用道具で引っ掛けて引っ張り出す
- ⑤ 一塊にして入り口に溜める。一呼吸
- ⑥ 鋤簾やレイキで冷まし場へ運ぶ
- ⑦ 黒土をかさげる（燃焼を止める）
- ⑧ 全て出し終えるまで④～⑦を繰り返す
- ⑨ 間髪入れず材を入れていく



1. 窯の内部



2. 炭材を道具を使い詰める



5. 着火



3. 入口まで詰める



4. 木っ端で塞ぐ



6. 土質の石で塞ぐ



7. 丸太と土で密閉



12. 窯出し 上部を引っ掻く



13. 入り口で集め、一呼吸



14. ジョレンで引っ張る

藤原だより-現地事務所報告-

雪に埋もれた師走の藤原

北山 郁人

昨年暮れのニュースでご存知のように、みなかみ町藤原では、12月15日から降り始めた雪が、16日午後8時までの48時間での降雪量が182センチで、観測史上1位となりました。さらにその後も降り続け、最終的には212センチまで一気に積もりました。例年2月頃には2mほど雪は積もるのですが、12月中旬に積雪0センチから212センチまで一気に積もるというのは、地元の80代のお年寄りでも初めてのことだと言っていました。

これも、温暖化の影響で日本海の海水温が高いために大雪になったと言われています。

例年年末年始に大雪になる事が多いのですが、今年は北陸で大雪になりましたが、みなかみ町ではそれほど雪は降りませんでした。1月24日現在では、140センチの積雪で多少落ち着いていますが、例年これから本格的に雪が降る時期になるので、気の抜けない2021年の冬となりそうです。



15. 黒土をかさげる



16. 冷ます

＜袋詰め＞

炭が沈静したら振るいにかける

1 度目粗い振るい 大きな炭

2 度目細かい振るい 小さな炭

残った屑は肥料にする



17..振るう



19.屑炭



18.白炭

＜以下は炭材の伐採、調達作業の様子です＞



上の写真は丸太を割る器械



■野守のつづやき(20)

～ 令和2年の振り返りと新年の展望 ～

●内輪のニュース

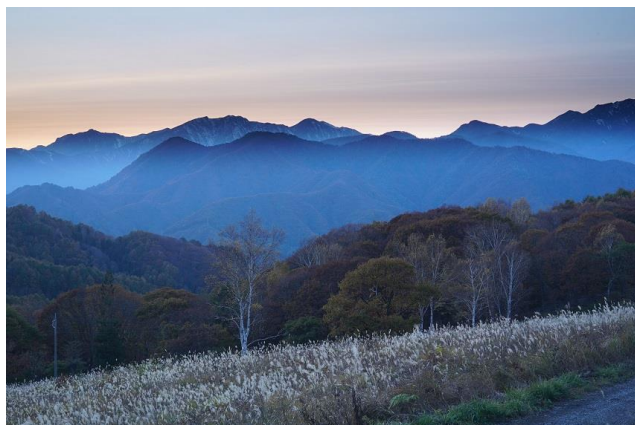
・三代目塾長の誕生～当塾発足20周年の昨春、草野塾長の英断で三代目塾長が誕生。家族ぐるみで藤原に移住して十年余の壮年！(写真→)。これまで通り、流域会員が支える。現代版「入会」フェーズⅢにご期待を。



・新人類会員の増加～昨秋来の新入会員のうち、お二人は“リ・トリート”と称する心の癒しや気分転換をお手伝いする仕事。森林散策などもその有効手段で、上ノ原はピッタリ。もう一方は、自伐型林業を志し首都圏から藤原へ移住せんと入会された方。美林づくりのお仲間！



・アマチュア写真家・S様との出会い～10月31日夕刻、フィールドの一面で偶然ばったり。上ノ原がお気に召して四季折々ご来遊の由。写真(↓)は当日、狙っておられた日没直後のショット。文科省指定「ふるさと文化財の森」に相応しい、日本の原風景そのものでは！



●外からの評価と期待



・「ふるさと文化財の森」指定に続き、昨年末には『茅採取』がユネスコの無形文化遺産「伝統建築工匠」に登録された。『茅葺』と並んで登録されたこの『茅採取』には野焼きから茅刈り、ボッチづくり、茅出しに至る一連の作業が含まれる由。(日本茅葺文化協会ヒアリング)

・草原や茅場の全国的減少傾向の中にあつて、これを食い止め伝統工匠の担い手を確保する営みは極めて重

要。評価は即ち期待。これからも、地元並びに町田工業さんや全国の仲間たちと連携・協働しつつ、茅刈り検定の継続など担い手の増強に意を用いていきたいもの。



●外へ向けて～明るい展望

・何とんでも、「ゆるぶの森」構想の進捗と活用。既に散策路のメインルートは整備され、会員向けセラピー・ウォークのプログラムも試行済み。楽しみなこと！



・我々の上ノ原「入会の森」の強みは、この森と十郎太沢の流れと草原の三点セット。このつながりを意識した

一体的運用により、何処にもない素晴らしいアメニティ空間が現実のものになるはず。

・地元・みなかみ町内はもとより、利根沼田地区や高崎・前橋エリアさらには利根川下流域の学校・団体などにも広く利用・参画を呼び掛けていきたいもの。

●一隅を照らす

・コロナに明け暮れた昨年、上ノ原の訪問頻度は激減。その分、ジムや図書館、散歩が増えた。近くの寺の掲示板に、Think Globally Act Locally 『一隅を照らす』と墨書してあった。



令和3年の今年、塾は設立21年の壮年期。小生は八十路の老境に入る。体力、気力、知力の衰えに従い無理なく出来ることを、と諭されたような気がした。コロナ禍のもとでも継続できるような活動はないものか・・・。

初夢は一隅照らす^{みち}径訪ね 令和3年小寒(青)

～編集後記～

今年度は新型コロナウイルス感染症を気にしながらの活動でした。4月に予定していた野焼きはできませんでしたが、7月から活動再開。秋の茅刈り、茅出しが予定通りに実施できたことは何よりでした。また、上ノ原の炭窯も稼働し、他団体の活動にも参加できましたが、年末から第三波が到来して、首都圏は二回目の緊急事態宣言下にあります。人間社会がどんな状況でも時間は止まりません。厳しい現実ですが、流れる時間のもとに私たちの生命もあります。今年はその中で活動することの有り難さが実感できる一年でありますよう。(稲)